能登やさしいこめづくり情報

田植え編　**育苗日数は1か月以内！**

令和５年４月
能登米振興協議会
能登米生産者協議会
ＪＡおおぞら

育苗日数１か月以内の健苗の田植えで早期活着！

活着を良くするためには、種もみの中に養分が残っている**苗の葉齢２．２葉期から２．５葉期に田植えする**ことが重要です。

葉齢２．２～２．５葉期になるのは育苗開始からおよそ３～４週間後（２０～３０日）となります。

注意

・育苗日数が長く、葉齢が進んだ老化苗を植えると、活着が遅れ、その後の株できも悪くなります。その結果、出穂期や登熟期がバラつき、未熟粒や屑米が多くなることで、品質低下や収量減少につながります。

1　田植え前の準備について

（１）苗の準備

① 育苗日数１か月以内の健苗を用意しましょう。（上記参照）
② 田植え４～５日前からは、夜間もハウス側面を開放し外気に慣らしましょう。

（２）代かき

① 代かきは田植え４日前までに行い、田面の高低差をなくし均平にしましょう。
　※初期剤を散布する場合は、農薬の登録を確認して下さい。
② 雑草の種子は、代かき後から発芽し始めます。代かきと田植えの間が長くならないようにしましょう（裏面「代かき後日数とノビエの葉齢の関係」を参照）。

2　田植え作業について

項目		取組内容	備考
(1)時期		5月上旬	登熟期の高温を避けるため早植は控える
(2)植付	本数	３～４本/株	植付け本数が多すぎると過繁茂となり品質低下の原因となる
	株数	６０株/坪以上	穂数確保のため、中山間地・低地力田・遅植等は７０株/坪を推奨
	深度	２～３ｃｍ	初期分げつ確保のため浅植えとする
(3)水管理		３～５ｃｍ	田植え後５日間は深水で植え傷みを防止

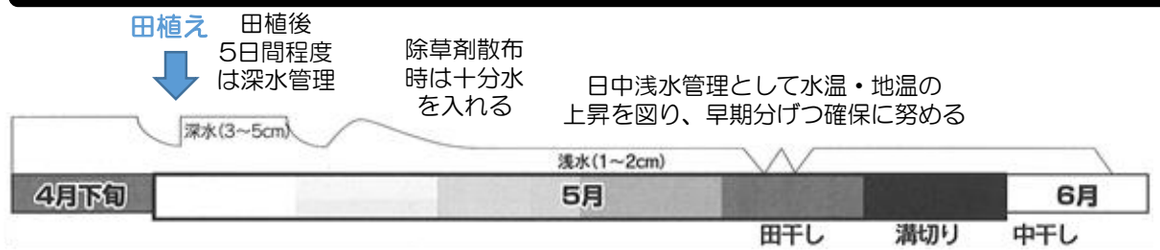
3　基肥施用について

能登米（コシヒカリ）は化学合成窒素成分量５.６kg/１０a以下

施肥体系	肥料名	施用量（kg/10a）	
		能登米コシヒカリ	早生品種
基肥一発	**BB有機入り能登コシ一発ＮＥＯ**	20～上限30	―
	BBけい酸パワー・コシ一発	40～上限55	―
	BB里山の香（特栽米）	45～上限53	―
	BB早生一発くんDX28（ノヒ）	―	35
分施体系	**BB高度056号**	20～上限28	30～40

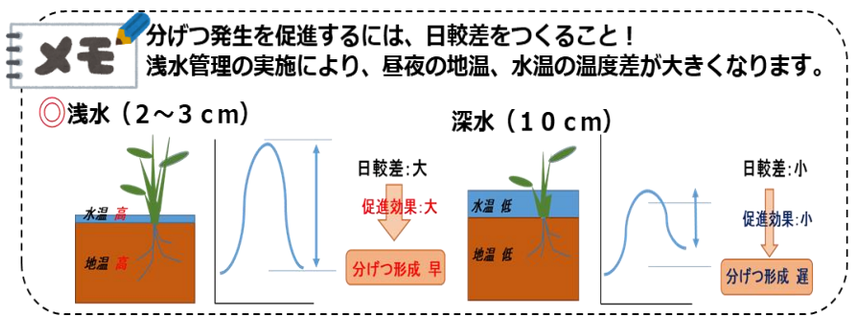
※注意　１：施用量は目安です。地力に応じて加減する。
　　２：能登米コシヒカリは、化学窒素成分量を３割削減した栽培のため、施用量の上限を厳守。
　　３：基肥一発肥料を全層施肥する場合、田植えまでの日数が開くと、穂肥の溶け出る時期とイネの生育ステージにズレが生じ、倒伏の原因となるので、代かきと田植え日を５日以上空けない。

4　田植え後から中干しまでの水管理について



ポイント

①田植え後５日間程度は、苗が水没しない程度の深水（３～５cm程度）とし、低温・強風から苗を保護する。
②活着後は日中２～３cmの浅水管理と軽い田干しを行い、早期分げつ確保に努める。



5　病害虫防除・除草剤の使用について

（１）苗箱施薬剤の散布について

苗箱施薬剤名	散布時期	散布量	主な対象病害虫
Dr.オリゼリディア粒剤 ２成分	移植当日	５０ｇ/箱	いもち病 ツマグロヨコバイ イネドロオイムシ イネミズゾウムシ ニカメイチュウ イネツトムシ 他

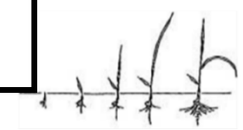
ほ場条件で除草剤を使い分ける基本パターン						
ほ場条件		パターン①		パターン②		パターン③
		雑草（ヒエ等）が少ない		雑草（ヒエ等）が多い		雑草（ヒエ等）が少ない
		水田の水持ちが良い		水田の水持ちが良い		水田の水持ちが悪い
除草剤	**必須**	**プライオリティ 1キロ粒剤**	成分 2	**マーシェット 1キロ粒剤** 田植え直後～ヒエ発生前（代かき後10日以内に散布） **プライオリティ 1キロ粒剤** マーシェット散布14日後散布	成分 1 2	**プライオリティ 1キロ粒剤** 田植え同時処理 **クリンチャー 1キロ粒剤** 1.5kg/10aを湛水散布でヒエ５葉期まで有効 **バサグラン粒剤** 落水散布	成分 2 1 1
	任意	(必要に応じて) **・ヒエクリーン １キロ粒剤** **・バサグラン粒剤**	1 1	(必要に応じて) **・ヒエクリーン １キロ粒剤**	1		
		合計成分数	2 (4)	合計成分数	3 (4)	合計成分数	4
備考		現行栽培パターン		初期剤を入れた後、初中期一発剤を入れることで雑草の発生を長く抑えることができる。		即効性のクリンチャーや落水散布のバサグランを散布することで、水持ちが悪い水田でも雑草を抑えることができる。	

（２）除草剤の使用について

本田内に雑草が多いと斑点米カメムシ類が集まりやすくなるので、本田の条件に合わせて、除草剤を使い分け、体系的に除草することが必要！

ポイント

①雑草は代かき直後から発生するので、除草剤の使用時期を守り、ノビエの適用葉齢以内に散布する。
②除草剤を散布は、余裕をもって代かきから１０日以内とする。
（代かき後日数とノビエの葉齢は下表を参考にして下さい）
③除草剤の散布後７日間は水田の水を排水せず、かけ流しも行わない。



（参考）代かき後日数とノビエの葉齢の関係

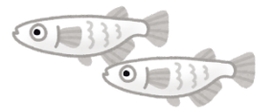
ノビエの葉齢		1.0 葉期	1.5 葉期	2.0 葉期	2.5 葉期	3.0 葉期
代かき後の日数（平年の場合）	輪島	８日	１３日	１８日	２２日	２５日
	珠洲	９日	１４日	１９日	２３日	２７日

（※５月１日に代かきを行なった場合を平年の有効積算温度により試算）

6　環境に配慮した米づくりの推進

代かき時の濁水の河川への流入防止

各ほ場からの泥の流出はわずかでも、それらが集まると猛烈なにごりとなります。川魚の多くは川底の石の裏側の隙間や水草に産卵するので、沈殿した泥の影響で孵化率が落ちることが懸念されています。

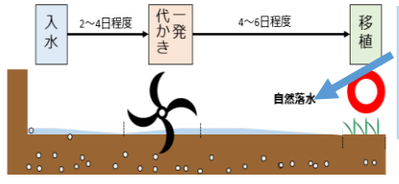


また、緩効性肥料を使用している水田では、肥料成分が溶けだした後のプラスチック被膜殻が代かき時に水面に浮上し、濁水の強制落水を行うと、被膜殻が河川や海洋等へ流出する可能性があります。

代かきは浅水で行い、田植え前に濁水を流す「強制落水」、特に代かき直後の濁水は排水しないようご協力をお願いいたします。

【プラスチック被覆殻の農地からの流出抑制対策】

近年、環境負荷軽減対策として、一発肥料に含まれる「プラスチック被覆殻」の河川への流出防止にむけた取組みが農業界に求められています。被覆殻の流出の**“9割“**は代かき時に発生しますので、「浅水代かき＋自然落水」と「被覆殻捕集ネットの活用」により、流出防止に努めましょう！



代かき、移植時の落水は極力行わないことで、肥料成分を含んだ水や土などの濁水の流出を防ぐことができる！

代かきの数日前に、田面全体が隠れる程度に入水し、圃場に十分浸透させ、田面に土が7～9割ほど露出したら代かきを行う！

☆水田の排水口に捕集ネットを設置し、集まった被覆殻をすくい取り処分することでも流出軽減が図れる！